

がん患者さんの心をケアする「カバーメイク」

がん治療には、手術、抗がん剤、放射線がありますが、最近ではがんワクチン療法という新たな治療法の研究が進められています。免疫治療の研究に携わっていた乳腺・内分泌外科の分田貴子医師は、抗がんワクチンを打った皮膚に赤い接種あとが残り、とても目立つことに違和感を覚えました。確かに治療は命にはかえがたい。でも患者さんはワクチンあとをどう感じているのだろうか？患者さんの本音を調べてみると、「本当は温泉に行きたいけれど…」「この皮膚を見たら母親が心配するので入浴介助ができない」などの悩みが寄せられました。しかし、皮膚反応が少ないワクチンは今の技術だと難しいのです。ならば、ワクチンあとを目立たないように隠せばよい。分田医師が現在取り組んでいる「がん治療患者さんへのカバーメイクとQOL（Quality of Life：生活の質）に関する研究」はこうしてスタートしました。

製品（ブランド）の種類	技術の種類
1982年リディア・オリリー夫人があざ等を隠すために作った化粧品がメディカルメイクの始まりとされている。	Skin Camouflage (スキン・カモフラージュ)
Covermark (アメリカ)	
Veil (イギリス)	
Dermacolor (ドイツ)	
Keromask (イギリス)	
Dermalend (アメリカ)	・リハビリメイク ・メディカルメイク ・セラビューティックメイク …など
資生堂 パーフェクトカバー (日本)	
マーシュフィールド SCシリーズ (日本) …など	

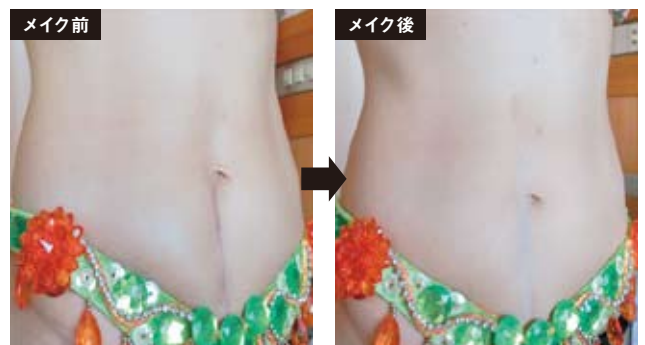
●カバーメイクの歴史

「英国赤十字社のジョイス・アルスワースさんは戦争で大やけどを負った兵士の傷跡をケアするため、「スキン・カモフラージュ」という独自の技術を開発した。5ブランドの製品を組み合わせで使用する。」

“カバーメイク”とは外見の気になる部分をファンデーションクリームで目立たなくする技術です。リハビリメイク、メディカルメイクともいわれ、アメリカで開発された化粧品がカバーメイクのは

じまりとされています（表参照）。第2次世界大戦後、英国赤十字社がスキン・カモフラージュ（Skin Camouflage）という独自の技術を確認しました。現在では、日本国内のブランドにおいてもカバーメイクの製品開発が行われています。なお、イギリスでは国内約150のクリニックで200名ほどのボランティアがスキン・カモフラージュを行っており、ファンデーションクリームには処方箋が出され保険適用されています。

では、カバーメイクによってがん患者さんのQOLに変化は見られるのでしょうか？分田医師が14名の患者さんに対して調査したところ、全員から「満足した」という結果が得られました。同時に、クリームを塗るのが面倒、服につく、水に弱いなどの問題点も挙げられ、こうした意見は製品開発の場で実際に活かされています。抗がん剤治療によるくすみや手術の傷あとなどで悩んでいる方にもっとカバーメイクのことを知ってもらい、患者さん自らがカバーメイクを希望し気軽に利用できる環境づくりをめざして分田医師の研究は続いています。



手術後もダンスを希望される患者さんへのカバーメイク

当院を受診される患者さんへ

4月より乳腺外科外来（月曜・午前）でカバーメイクの相談を行っています。ご希望の方は主治医にご相談いただくか、予約センター（Tel：03-5800-8630）からご予約ください。